



実施者

＜教員＞千葉大学 特任専門員 / 地域コーディネーター 阿部 厚司

＜参加者＞千葉大学 理学部 生物学科 機能生態学研究室 4年 奥山 登啓

＜協働パートナー＞

【行政】南房総市役所 市民課市民協働グループ

【企業等】ヤマナハウス、大房岬自然の家、シラハマ校舎

【個人】ヤマナハウス南房総三芳のシェア里山 代表 永森 昌志、副代表 沖 浩志、マネージャー 溝口 耕一
南房総市大房岬自然の家 所長 神保 清司、合同会社 WOULD 代表 多田 朋和

1. 背景と目的

日本は世界的に「科学的な思考力」の育成が不十分であると指摘されている。科学的思考力とは、科学的知識に基づき論理的に判断したり活用する力である。このような教育課題の背景として、私は、教育実習での実体験を踏まえて次のことを指摘したい。一つが、「暗記型の学習スタイルにより、アウトプットの機会が失われている」点である。中等教育で扱う内容はますます高度化しており、特に生物の分野において顕著といえる。このような状況により、生徒が目で見手で触れるといった機会は、教科書暗記型の学習に取って代わられてしまっている。もう一つが、「原体験に繋がる経験が、育った地域や親の影響によって等しく提供されていない」点である。大学の同期で生物を専攻している友人の多くは、幼少期に原体験となるような経験をしており、体験型学習の重要性が伺える。

そこで私は、南房総の豊かな自然に着目した。首都圏に隣接しながらもたくさんの動植物が生息しており、自然が身近でない都会の学生にとってはもちろん、地域の学生にとっても最適なフィールドが用意されていると感じた。この環境を活かした自然体験型学習プログラムは、学校教育でインプットした知識を実際にアウトプットできる楽しさを感じると共に、その後、生徒自ら更なる学びへと発展させていくきっかけになると考えた。最終的には南房総でのプログラムを例に、全国の地域でこうした取り組みが広がることを目指す。

2. 活動内容

ヤマナハウス (4/16, 5/7, 5/21, 6/4, 8/7, 9/3, 10/5, 10/8, 11/5, 12/4, 1/8, 1/21, 2/5) 計13回

大房岬自然の家 (5/10, 5/22, 8/29～31, 9/5～7,) 計4回

シラハマ校舎 (5/28～29, 6/5, 1/22) 計3回

(1) ヤマナハウス

ヤマナハウスでは、ヤマナメンバーの一員として月例イベントやヤマナア

デミーなどの活動に参加した。刈払機の操作や階段の整備など、普段の大学生活では決して体験できない経験を通して、多様な知識とスキルを身に付けることができた。また、裏山での天体観測や金比羅山でのトレッキングなど、一部の企画を担当する機会も頂いた。安全性やスケジュールとの兼ね合いから、達成できなかったアイデアも多々あるが、生物学をいかにイベントに落とし込むかについて学ぶ大変良い経験となった。アンケートでは前向きな意見を沢山頂き、今後の活動に向けて自信となった。

(2) 大房岬自然の家

大房岬自然の家では、イベントスタッフとして活動に参加し運営の補助を行った。5月のモリカツでは焚き火ブースを担当し、地域の方々と交流を深めつつ、森を保全していくことの重要性について学んだ。8月と9月には地元の中학생を対象とした自然体験学習に同行させて頂き、コースティングやビーチコーミングといったアクティビティに参加した。生徒たちは雄大な自然を満喫するとともに、身近な海で進行している環境問題について議論した。他人事ではなく真剣に問題と向き合っていた姿が印象的である。自然との関わりを経て地元愛を育んでいく様子を、生徒と同じ目線で目の当たりにすることができた。

(3) シラハマ校舎での活動

シラハマ校舎では、「森プロジェクト」と題して、日本各地で進行中のナラ枯れという環境問題に取り掛かった。ナラ枯れとは、ブナ科の木に昆虫が穿入し樹木を枯死させる伝染病である。千葉県では被害の多くがマテバシイとなっているが、マテバシイの事例は全国的にデータが少なく、県が対策に迫られている。私はこの問題に対して、シラハマ校舎で頻繁に目撃されるキツツキを利用することで、自然への負担も少なく、継続的かつ効果的な対策が期待できると考えた。シラハマ校舎の森を対象に調査したところ、ナラ枯れが原因と見られる枯れ木が複数見られた。また、設置したトラップにはナラ枯れを引き起こす昆虫が確かに確認された。一方、設置した鳥の巣箱は利用されなかった。今後はキツツキがナラ枯れの対策に



1 金比羅山トレッキングガイド 2 自然体験プログラム 3 シラハマ校舎の森プロジェクト 4 里山を彩る 5 交流の様子

域学協働の工夫！

★ヤマナハウス、大房岬自然の家、シラハマ校舎という異なる拠点を活用できたことで、多様な視点から体験型学習の魅力について考えることができた。

★駅から活動拠点までの送迎をヤマナメンバーの方々に依頼していたが、移動の効率が上がり作業時間が長く確保できただけでなく、車内でのコミュニケーションを通して関係をより深めることができた。

★ヤマナハウスでの活動後そのままの足でシラハマ校舎へと移動することで時間と移動費のコストを削減することができた。

果たして効果的なのかを調べる必要がある。

3. 成果と課題

(1) 地域貢献面

地域の方々と交流を通して、私が専門とする生物学の面白さをわかりやすく還元することができた。また、学生独自の視点から活動に踏み込むことで、地域の団体に新しい風を吹かせることができたと感じる。一方、自然体験型学習プログラムの確立という最終的な目標に向けては、まだまだスタッフの域を越えられずにいる。今後は企画力と実行力を磨いていく必要がある。

(2) 教育・研究面

大房岬自然の家での学生との関わりの他、例えばヤマナハウスでは、移住を希望する方やゼミで訪問した大学生などを対象に里山のガイドを行った。山歩きに慣れていない方でも気軽に参加できるよう

*表彰・マスコミ掲載など

・「YAMANAHOUSE HOME | 日々」掲載 <https://yamanahouse.site/>

・「南房総市移住・定住情報サイト」掲載 <https://www.minamibosociety-iju.jp/>

・「株式会社ミライノラボ【公式】」掲載 <https://note.com/mirainolab/n/n012b16b88f44>

な案内を心がけ、教育面に貢献できたと言える。また、シラハマ校舎で進めている森プロジェクトについては、新規性の高いテーマに取り組んでおり、今後データのサンプル数を増やしていくことで研究面への貢献が期待できると考えている。

3. 今後の展開

今年度はスタッフとして最前線に立ち、様々な場面で地域の方との繋がりを深めるとともに、多様な知識やスキルを身に付けることができた。今後は、これまで培った経験やコミュニティを活かして、より実践的な活動に着手していきたい。具体的には、来年度の夏に「自由研究プログラム 2023」と題した企画を計画している。一般的なサマーキャンプとは異なり、生徒と近い目線で、かつアカデミックな研究体験ができるような場をしたいと考えている。